

目的 既報(第33総会)のように、ヒトの食味嗜好の傾向は年齢、性別により異なるが、その変化が幼児より成人に至る発育令のどの段階で現われるかについてはなお明らかにされていない。そこでこの幼児(幼稚園児)～成人間の中間段階にある男女(小6、高1生)を対象として上記に関する調査解析を試みた。

方法 前回行った甘、酸、塩味各品目、計15品目について前回同様それぞれ5段階の嗜好尺度を設け、その嗜好度を対象者に判定させ集計した。その結果を各食品の嗜好に対する特徴を把握するため嗜好曲線で示すとともに、年齢別、性別の相違を嗜好度として嗜好得点の平均値±標準偏差で示し、t検定その他の処理を行った。

結果 幼児から成人に至る成長過程を通じて明らかな食味嗜好性の变化が認められた。このさい(1)一般に成人するにつれて甘味嗜好性は低下し、塩味・酸味嗜好性は上昇した。このことは、消費者が嗜好指数を用いた解析によりすでに指摘した「甘味への対立味としての塩味・酸味」とする見解を傍証するものであろう。(2)また幼児→成人の中間段階(小6、高1、高3)では帯甘味性酸味品については男女とも幼児に似た嗜好パターンを示し、一方、酸味・塩味品に対しては(高3において)成人に近い嗜好傾向が認められた。(3)以上のような成人までの成長過程における食味嗜好性の变化は、特に思春期後期(高→大)に着しく生じるものと考えられる。(4)このような变化の原因が、生理的体質変化に基づくものか、あるいは生活環境の影響によるものかに関しても若干言及したい。